

富士山、立山と並び「日本三名山」の一つに数えられる白山。

古くから人々が仰ぎ見て、祈りをささげてきた「霊峰」に、越前の僧・泰澄(たいちよう)が初めて登ったのが、養老元年(西暦717年)のことでした。9世紀になると、加賀・越前・美濃(現在の石川県・福井県・岐阜県)のそれぞれに馬場(ばんば)と呼ばれる霊持の拠点がありました。以降白山は、神と仏が共存する修験の場として栄えます。加賀馬場の白山本宮は、全国約3千社の白山神社の総本宮・白山比咩(しろやまひめ)神社として崇敬を集めています。明治になると、政府によって神と仏、神社と寺院がはっきり分かれることになりました。千年以上続いた神仏習合の歴史はこのとき終りを告げましたが、白山麓の村人たちは、山から下すことができた数体の仏像を、現在まで静かに守り続けています。

明治以降の白山は、信仰の山としてだけでなく、美しい自然を楽しむことができる山として、多くの登山者に愛されてきました。高山帯を持つ山としては日本最西端に

位置するため、生物分布を研究する上でも重要ですが、特に、色とりどりの高山植物が咲く「お花畑」の存在は、白山が「雲上の楽園」とも呼ばれるゆえんとなっています。

このように、深い信仰の歴史を秘め、美しくも美しい自然の中に秘かに存在を誇り立てられる白山は、平成29(2017)年、開山1300年を迎えます。

【北陸鉄道グループのバス・電車と白山】

白山登山バスは、昭和21(1946)年に鉄道金名線に接続する形で、白山下～市ノ瀬間の運行を開始。その後、金沢駅発の系統も新設し、昭和40(1965)年には、道路整備に伴い別当出合へ延伸しました。以降、白山を訪れる登山客の方の足を担ってきました。現在は、金沢駅～別当出合間の急行バスに加えて、マイカー規制日には市ノ瀬～別当出合間のシャトルバスも運行。白山の自然環境保全にも貢献しています。